

## マガモ

澄川の森では雪解け水が谷地にあふれてエゾアカガエルの声が賑わい始めました。2012年4月23日の活動日、きのこの植菌をしに奥に行った仲間たちを外れて、独り基地に残り、焚き火の番をしながら標柱作りの作業をしていました。溜り水池になにやら動く気配を感じました。密やかにペアのマガモが水に漬かった枯れ草の中を嘴でせせっていました。撮影した画像でもマガモと判別できます。バカチオンデジカメでのズームングですからこれでも上等なのです。



マガモは札幌市内でも四季を通じて道庁の池、中島公園の池、豊平川などでいつでも見ることができます。別段に珍しい鳥ではありませんが、澄川の基地近くで見るのはこの時期をおいてはありません。エゾアカガエルやエゾサンショウウオの卵を狙ってのご入来と見うけました。

雄は頭から頸にかけての金属光沢の美しい緑色で、その他の全体の配色も品がありバランスもよくおしゃれであります。一方雌はカモ類おしなべて保護色まみれでこの画面の中にいるのですが、拡大鏡をつかって見てもわかりにくいのです。画面の雄の前2カモ身において頭を水につこんでいるのです。動いてくれなければまず見つかりません。この雌は間もなくどこかで巣ごもりして雛を孵し西岡公園の池か真駒内川で子育てをするのでしょう。

孵化当初は10羽前後の雛を連れています。キツネ、テンやイタチ、鳥ではカラス他猛禽たちなどに襲われ数を減らし、成長できるのは1~2羽でしかありません。それもこれも自然の摂理、食物連鎖の輪に組み込まれているのです。

雪が消えた後の苗や植木は散々な状態でした。この冬の厳しさがよく判ります。ネズミの被害が甚大なのです。ネズミにしても食べ物がなくなって美味しくもない木の皮まで齧らざるを得なかったわけで、切ないことなのですが、それにしても自然発生した稚樹は比較的被害がないのですが、人間が植えた木はまず齧られます。種や苗の時代に過保護状態(自然児に較べて)にあったことで、毒素を身にまとう必要度が低かったと思ったりしていますが、この問題は学者に解明していただきたいと思っております。

